

古今和歌集304番歌の考察～古今集四季部の対立構造をもとに～

国語班: 沼澤 清奈

Abstract

the purpose of this study is to try to interpret of Japanese classical poem called *waka* in *kokin wakashu* Japanese classical poem collection collected about 1000 ago from its structure. The 304th poem in *kokin wakashu* has been interpreted by many researchers, however the interpretation cannot be the same because one phrase contained in the poem cannot interpret by only in terms of grammar. This paper attempts to interpret the 304th poem by using structure of *kokin wakashu*. Result indicates that there is possibility to interpret poems in *kokin wakashu* by considering structure of *kokin wakashu*.

要約

古今和歌集(以下古今集)に納められている歌には解釈が注釈書や研究者によって異なるものがある。古今集304番歌(以下304番歌)はそのような歌の1例である。304番歌では「落つる紅葉ば」という言葉の解釈が参考文献ごとに異なっており、本研究では古今和歌集の構造をもとに、和歌を解釈するという新しい視点から304番歌の解釈を行った。先行研究において304番歌は落葉の歌群に分類されている。本研究では、落葉の歌群に収められている歌の対立構造を利用して、304番歌の解釈を行った。その結果、「落つる紅葉ば」の紅葉は水面にあることが示唆された。

1. はじめに

古今和歌集(以下古今集)に納められている歌には解釈が注釈書や研究者によって異なるものがある。古今集304番歌(以下304番歌)はそのような歌の1例である。304番歌では「落つる紅葉ば」という言葉の解釈が参考文献ごとに異なっており、本研究ではこの歌の解釈を新たな視点(古今集の構造研究に基づいた視点)から提案することを目的としている。

304番歌は参考文献において文法の観点から解釈が考察されていたが、304番歌における研究者間の解釈の揺れは文法をもとに解釈を考察するのみでは解釈が定まらない。本研究では古今和歌集の四季部は対立構造をなすという先行研究の記述に基づき304番歌の解釈を考察する。

2. 研究手法

文献調査

- ①先行研究に基づいて対立構造を特定する。
- ②対立構造から歌の解釈を考える。

3. 結果

古今和歌集304番歌を以下に示す。

[詞書]池のほとりにて紅葉の散るをよめる

風吹けば落つるもみぢ葉 水きよみ散らぬかげさへ底に見えつつ
みつね

この歌を品詞分解すると「落つるもみぢ葉」の部分は「落つる」がタ行上二段活用連体形「もみぢ葉」は名詞となり、助動詞が含まれていないことがわかる。

そのためこの歌のもみぢの位置は文法という観点のみで解釈をすると、解釈は人によって異なることが

容易に想像できる。

実際三つの参考文献で304番歌の訳を調べたところ以下のものであった。

新編日本古典文学全集³⁾：風が吹かれて池の上に落ちたもみぢの葉は、水面を美しく彩っている。そして水が清いために散らないで枝にある葉の影までが波の合間に池の底に見え隠れして きれいだよ。

古今和歌集全評釈⁴⁾：風が吹くと水の中に落ちる紅葉の葉はその池の水が澄んでいるゆえに。散らずに枝に残っている葉の影までが、散った紅葉と同様に水の底に映って見えることである よ。

新日本古典文学体系⁵⁾：風が吹くと散り落ちていくもみぢ葉は、水が澄んでいるので、その散り行く紅葉の影に加えて、枝から離れ散らないもみぢの影までが、水底にちらちら見えていて...

赤色で示しているところが、「落つるもみぢ葉」の現代語訳であり、どの参考文献においても その訳が異なっていることがわかる。本研究では、文法の観点に加えて、古今和歌集の構造を 視野に入れた解釈を行う。

先行研究⁶⁾では「古今和歌集はすべての歌が有機的に結びついた一つの体系として機能し、対立構造をもとに成り立っている」と主張されていた。古今集の対立構造では、同集中の歌が時系列ではなく「春と秋」、「夏と冬」の様な対立構造をもとにして編纂されていると考える。

下に示した表1は古今集の対立構造の例を示している。

古今集(秋)対立構造分析表(改)

歳時	立秋(169,170)			
	秋景	秋告	天象(秋風)	(171-173)
			人文(七夕)	(174-183)
		秋興	人事(悲秋)	(184-190)
			天象(秋月)	(191-195)
景物	動物,聞くもの	野 虫		(196-205)
		鳥		(206-213)
		山(鹿)		(214-217)
	植物,見るもの	種としての草(秋草九種)		(218-248)
		種としての草木(紅葉)		(249-267)
		種としての草(菊)		(268-280)
		種としての草木(落葉)		(281-305)
		種としての草(秋田の稲穂)		(306-308)
歳時	うつろう秋(309,310)			
	秋の終わり	果て(311)		
		つごもり(312,313)		

新井栄蔵(古今和歌集四季部に付いての一考察)

※ ()内算用数字歌番号

表1 古今和歌集対立構造分析表(改)

本研究では古今集の歌は対立構造をもとに成立しているという主張に従うこととする。

上の表は先行研究において古今集秋の対立構造を示したものである。

上の表から304番歌は落葉の歌郡に分類されることが読み取れる。

①落葉の歌群に分類されている歌を番号順に並べたところ、

281[詞書] 題しらず よみ人しらず

さほ山¹⁾の柞²⁾のもみぢ散りぬべみ夜さへ見よと照らす月かけ

282[詞書] 宮仕え久しう奉らで、山里に籠もり侍りけるに、よめる 藤原関雄

奥山³⁾の岩垣もみぢちぬべし照る⁴⁾旦⁵⁾のひかりみる時なくて

- ・上記のように連続した歌に共通する言葉(上記の2首では下線で示している)が含まれること。
(共通する言葉が含まれた連続した歌を以下ペアとする。)
- ・前半(歌番号281-290)の歌群では読人知らず歌が並んでいること。 (歌番号282のみ歌人の名前が明記されている)
後半(歌番号291-305)の歌群ではすべての歌で歌人の名前が明記されていること。
この2つの事実が明らかになった。

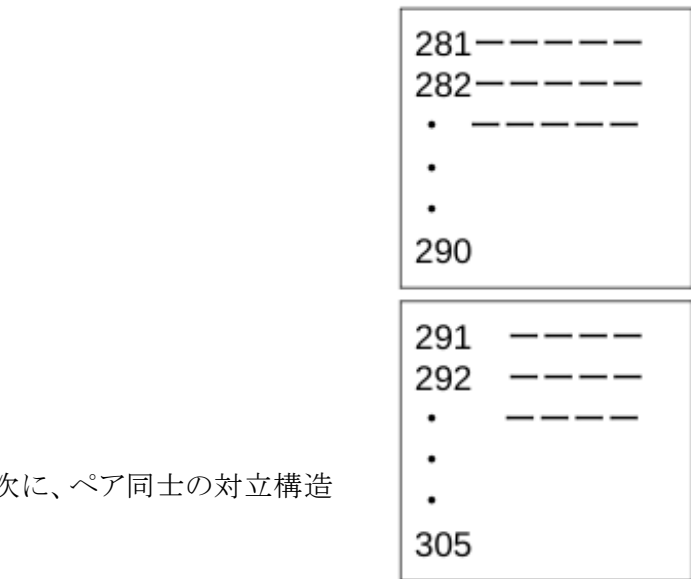
281 282	山、照る、見る
283 284	竜田川、流る、
285 286	風
287 288	踏み分けて、道
289 290	<u>千種₍₂₈₉₎、数₍₂₉₀₎</u>
291 292	<u>関雄₍₂₉₁₎、雲林院₍₂₉₂₎</u>
293 294	竜田川
295 296 297	山
298 299 300	幣、たむく
301 302 303	流る
304 305	水、見る
算用数字は歌番号を示す	

表2 ペアに含まれる共通する言葉を歌番号順に並べた表

上の表でペアに含まれる共通する言葉を歌番号順に示した。また複数の共通した言葉がペアに 含まれる場合は、すべての共通した言葉を示している。青文字になっている289、290のペアで は完全に同じ言葉は含まれていなかったが、「千種」、「数」という数に関連する言葉を共通す る言葉として採用し た。291、292のペアでは同じ言葉は含まれていなかったが、291番歌を読 んだ関雄という歌人は「日本 文徳天皇実録」⁹⁾において「関雄亦草書を能くす。南池・雲林両院 の壁、皆関雄をして之れを書かしむ る也。」という記述がある。291番歌を読んだ歌人と292番歌 の詞書の「雲林院の木のかげにたたずみて よみける」という記述があることから、この2首は 「関雄」、「雲林院」が共通する言葉となるペアであるとし た。

4. 考察1

上記の結果をもとに落葉の歌群の対立構造を考察した。
落葉の歌群中の歌を番号順に並べた時、前半後半の歌群で大きく2つの対立を作ることを表したの が下記の図1である。



次に、ペア同士の対立構造

1図1落葉の歌群の対立構造

前半の最初のペアと後半の最初のペアを比較すると、同じ言葉が含まれていることがわかる。

また、ここに出した例の歌に限って言えば、同じ対立構造内の歌でも例えば281と291、282と 292のように、ペアの中でもより小さな番号の歌と、大きな番号の歌がそれぞれ、対立するペア の小さな番号の歌、大きな番号の歌と対応している事がわかる。

281[詞書] 題しらず よみ人しらず

さほ山の柞のもみち散りぬべみ夜さへ見よと照らす月かけ

282[詞書] 宮仕え久しう奉らで、山里に籠もり侍りけるに、よめる 藤原関雄

奥山の岩垣もみちりぬべし照る日のひかりみる”かげなく”て

(新編日本古典文学全集、古今和歌集全評釈では”見る時なくて”となっている)

↑対立

291[詞書] 題しらず せきを

霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦の織ればかつ散る

292[詞書] 雲林院の木のかげにたたずみてよみける 僧正遍昭

わび人のわきて立ち寄る木のもととは頼む”影なく”紅葉散りけり

前半の最初のペアと後半の最後のペアを比較すると、同じ言葉が含まれていることがわかる。

289[詞書] 題しらず よみ人しらず

秋の月山辺さやかに照らせるは落つる紅葉のかずを見よとか

290[詞書] 題しらず よみ人しらず

吹く風の色のちくさに”見え”つるは秋の木の葉の散ればなりけり

↑対立

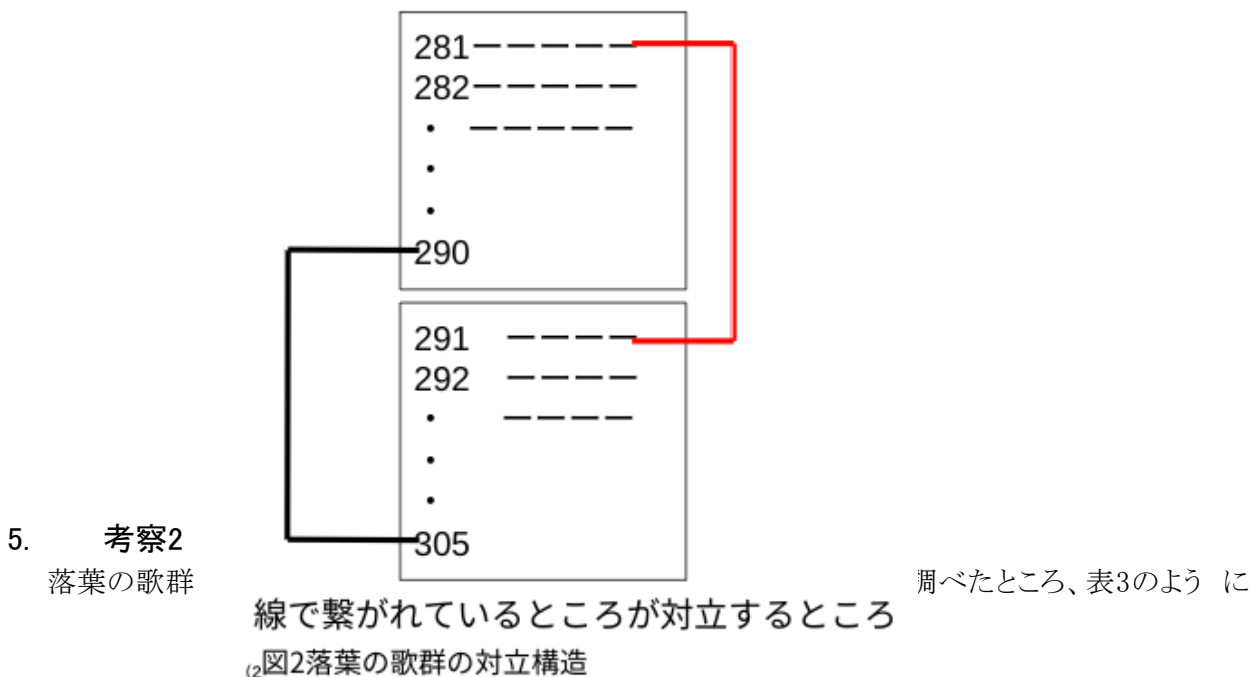
304[詞書]池のほとりにて紅葉の散るをよめる みつね

風吹けば落つるもみぢ葉水きよみ散らぬかげさへ底に見えつつ

305[詞書] 亭子院の御屏風の絵に、川渡らむとする人の、紅葉の散る木のもとに、馬をひか えて立てるをよませ給ひければ、つかうまつりける

立ちとまり”見て”を渡らむもみじ葉は雨と降るとも水はまさらじ

このことから、落葉の歌群の和歌の対立構造は図2のようになっていると考えられる。



なった。

281	散っていない	291	散った
282	散っていない	292	散った
283	河に流れる	293	流れて止まっている
284	河に流れる	294	流れている
285	散った	295	散っている
286	散った	296	？
287	散った	297	散っている
288	散った	298	散っている
289	不明	299	散っている
290	散っている途中	300	散っている
		301	波の上に
		302	河の上に
		303	河の上に
		304	？
		305	まだ散っていない

表3 落葉の歌群の落葉の位置(算用数字は歌番号を表している)

また、この落葉の位置がそれぞれ対立し合うと考えた。表4の矢印は落葉の位置が対立し合っていることを示している。

例えば、①枝についた状態に対立するのは②散っている途中(空中・水中)と③地面(水面)に散った状態のである。

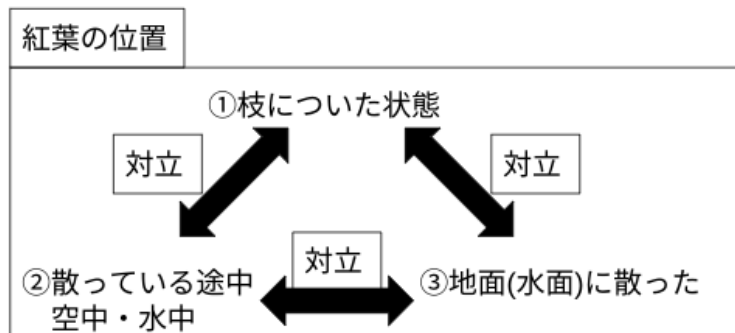


表4 もみじの位置

考察1より、304番歌は305番歌とペアになり、289番歌、290番歌のペアと対立する。ここで、この4首の紅葉の位置を以下にまとめる。(算用数字は歌番号を表している)

- 289 不明(“落つるもみじ葉”という語が含まれており、判定不可。)
- 290 もみじは散っている途中(図5中の②)
- 304 不明(“落つるもみじ葉”という語が含まれており、判定不可。)
- 305 もみじはまだ散っていない(図5中の①)

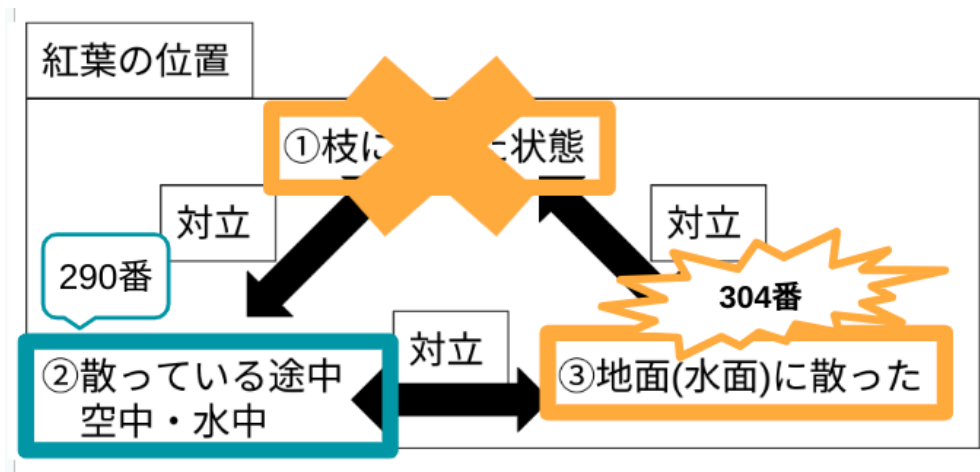


表5 304番歌のもみじの位置の考察

歌の対立と、もみじの位置の対立を図5中に配置して考えていく。

290番歌のもみじは表4の②の位置にある。

この位置のもみじは、①の位置にあるもみじと、③の位置にあるもみじと対立している。

また、290番歌と対立するのは304番歌と、305番歌である。

そのため、304番歌は表4中では290番歌と対立する①か③の位置にあることになる。

しかし304番歌の文脈から、304番歌のもみじは①の位置(もみじが散っていない状態)ではないことがわかるため、304番歌は図中の③の位置(地面または水面に散った)にプロットできる。

また304番歌の詞書に「池のほとりにてよめる」とあることから、もみじは水面に落ちたと考えた。

6. 結論

304番歌の”落つる紅葉ば”の紅葉は古今集の構造という点から解釈すると水面にある可能性が示唆された。参考文献の中では、新編日本文学全集の訳が最も本研究の解釈に近い。(新編日本古典文学全集の訳を以下に引用する)

風に吹かれて池の上に落ちたもみじの葉は、水面を美しく彩っている。そして水が清いために散らないで枝にある葉の影までが波の合間に池の底に見え隠れしてきれいだよ。

本研究によって古今和歌集の対立構造を和歌の解釈にも応用できることが分かった。和歌の解釈が必ずしも1つに決まる必要はないが、文法という一つの視点からのみの解釈によって研究者間の解釈が不必要に異なることを是正する一つの手立てとして、この研究が和歌の解釈に新しい視点をもたらすことを願っている。

7. 参考文献

- 1)日本文学研究資料刊行会,日本文学研究資料叢書,有精堂,1976滝川,幸司
- 2)松尾總,永井和子,新編日本古典文学全集11 古今和歌集,第9版,小学館,2017,542p.
- 3)片桐洋一,古今和歌集全評釈上,株式会社講談社,2019,1092p.
- 4)小野憲之,新井栄蔵,新日本古典文学体系5 古今和歌集,岩波書店,1989
- 5)滝川,幸司,藤原関雄伝覚書,Osaka University Knowledge Archive,2013,17p.